

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

* 「だが」「しかし」多いな...

補足

ex1

1 環境問題は、汚染による生態系の劣悪化、生物種の減少、資源の枯渇、廃棄物の累積などの形であらわれている。その原因は、自然の回復力と維持力を超えた人間による自然資源の搾取にある。環境問題の改善には、思想的・イデオロギー的な対立と利益の衝突を超えて、国際的な政治合意を形成して問題に対処していく必要がある。

2 ~~しかし~~環境問題をより深いレベルで捉え、私たちの現在の自然観・世界観を見直す必要性もある。というのも、自然の搾取を推進したその理論的・思想的背景は近代科学の自然観にあると考えられるからだ。もちろん、自然の搾取は人間社会のトータルな活動から生まれたものであり、環境問題の原因のすべてを近代科学に押しつけることはできない。

3 ~~しかし~~近代科学が、自然を使用するに当たって強力な推進力を私たちに与えてきたことは間違いない。その推進力とは、ただ単に近代科学がテクノロジーを進展させ、人間の欲求を追求するためのコウリツ的な手段と道具を与えたというだけではない(テクノロジーとは、科学的知識に支えられた技術のことを言う)。近代科学の自然観そのものの中に、~~生態系の維持と保護に相反する発想が含まれていたと考えられるのである。~~

4 近代科学とは、一七世紀にガリレオやデカルトたちによって開始され、次いでニュートンをもって確立された科学を指している。近代科学が現代科学の基礎となっていることは言うまでもない。近代科学の自然観には、中世までの自然観と比較して、いくつかの重要な特徴がある。

5 第一の特徴は、機械論的自然観である。中世までは自然の中には、ある種の目的や意志が宿っていると考えられていたが、近代科学は、自然からそれら精神性を剝奪し、定められた法則どおりに動くだけの死せる機械とみなすようになった。

6 第二、原子論的な還元主義である。自然はすべて微少な粒子とそれに外から課される自然法則からできており、それら原子と法則だけが自然の真の姿であると考えられるようになった。

7 ~~ここから~~第三の特徴として、物心二元論が生じてくる。二元論によれば、身体器官によって捉えられる知覚の世界は、主観の世界である。自然に本来、実在しているのは、色も味も臭いもない原子以下の微粒子だけである。知覚において光が瞬間に到達するように見えたり、地球が不動に思えたりするのは、主観的に見られているからである。自然の感性的な性格は、自然本来の内在的な性質ではなく、自然をそのように感受し認識する主体の側にある。つまり、心あるいは脳が生み出した性質なのだ。

8 真に実在するのは物理学が描き出す世界であり、そこからの物理的な刺激作用は、脳内の推論、記憶、連合、類推などの働きによって、チツジョある経験(知覚世界)へと構成される。つまり、知覚世界は心ないし脳の中に生じた一種のイメージや表象にすぎない。物理学的世界は、人間的な意味に欠けた無情の世界である。

9 それに対して、知覚世界は、「使いやすい机」「嫌いな木」「美しい樹木」「愛すべき人間」などの意味や価値のある日常物に満ちている。しかしこれは、主観の対象にそのように意味づけたからである。こうして、物理学が記述する自然の客観的な真の姿と、私たちの主観的表象とは、質的にも、量的にも、まったく異なるものとみなされる。

10 ~~これが二元論的な認識論である。~~ここでは、感性によって捉えられる自然の意味や価値は主体によって与えられるとされる。

セット(累積的)

ex2

ex3

自然賛美の抒情詩を作る詩人は、いまや人間の精神の素晴らしさを讃える自己賛美を口にしなければならなくなつたのである。こうした物心二元論は、物理・心理、身体と心、客観と主観、自然と人間、野生と文化、事実と規範といった言葉の対によって表現されながら、私たちの生活に深く広くシントウしている。(日本における理系と文系といった学問の区別もそのひとつである。二元論は、没価値の存在と非存在の価値を作り出してしまふ。

11 二元論によれば、自然は、何の個性もない粒子が反復的に法則に従っているだけの存在となる。こうした宇宙に完全に欠落しているのは、ある特定の場所や物もつていないはずの個性である。時間的にも空間的にも極微にまで切り詰められた自然は、場所と歴史としての特殊性を奪われる。近代の自然科学に含まれる自然観は、自然を分解して利用する道をこれまでないほどに推進し

ex4

ex5

変なイマ

R1

自然賛美の抒情詩を作る詩人は、いまや人間の精神の素晴らしさを讃える自己賛美を口にしなければならなくなつたのである。こうした物心二元論は、物理・心理、身体と心、客観と主観、自然と人間、野生と文化、事実と規範といった言葉の対によって表現されながら、私たちの生活に深く広くシントウしている。(日本における理系と文系といった学問の区別もそのひとつである。二元論は、没価値の存在と非存在の価値を作り出してしまふ。

11 二元論によれば、自然は、何の個性もない粒子が反復的に法則に従っているだけの存在となる。こうした宇宙に完全に欠落しているのは、ある特定の場所や物もつていないはずの個性である。時間的にも空間的にも極微にまで切り詰められた自然は、場所と歴史としての特殊性を奪われる。近代の自然科学に含まれる自然観は、自然を分解して利用する道をこれまでないほどに推進し

We Now

We

Now

We Now (Must)

grounding (訂正 出点 着地点)

《変化する》
R₂ ex5

た。最終的に原子の構造を砕いて核分裂のエネルギーを取り出すようになる。自然を分解して(知的に言えば、分析をして)、材料として他の場所で利用する。近代科学の自然に対する知的・実践的態度は、自然をかみ砕いて栄養として摂取することに比較できる。

12 近代科学が明らかにしている自然法則は、自然を改変し操作する強力なテクノロジーとして応用されていった。しかも自然が機械にすぎず、その意味や価値はすべて人間が与えるものにすぎないのならば、自然を徹底的に利用することに躊躇を覚える必要はない。本当に大切なのは、ただ人間の主観、心だけだからだ。こうした態度の積み重ねが現在の環境問題を生んだ。

13 本質は、この自然に対するスタンスは、人間にもあてはめられてきた。むしろその逆に、歴史的に見れば、人間に対する態度が自然に対するスタンスに反映したのかもしれない。近代の人間観は原子論的であり、近代的な自然観と同型である。近代社会は、個人を伝統的共同体の枠から脱出させ、それまでの地域性や歴史性から自由な主体として約束した。つまり、人間個人から特殊な諸特徴を取り除き、原子のように単独の存在として遊離させ、規則や法に従ってはたらく存在として捉えるのだ。こうした個人概念は、たしかに近代的な個人の自由をもたらしたし、人権の概念を準備した。

14 近代社会に出現した自由で解放された個人は、同時に、ある意味でアイデンティティを失った根無し草であり、誰とも区別のつかない個性を喪失しがちな存在である。(そうした誰ともコウカン可能な個性のない個人(政治哲学の文脈では「負荷なき個人」と呼ばれる)を基礎として形成された政治理論についても、現在、さまざまな立場から批判が集まっている。物理学の微粒子のように相互に区別できない個人観は、その人のもつ具体的な特徴、歴史的背景、文化的・社会的アイデンティティ、特殊な諸条件を排除する点でなりたっている。

15 だが、そのようなものとして人間を扱うことは、本当に公平で平等なことなのだろうか。いや、それ以前に、近代社会が想定する誰でもない個人は、本当は誰でもないのでなく、どこかで標準的な人間像を規定してははいないだろうか。そこでは、標準的でない人々のニーズは、社会の基本的制度から密かに排除され、不利な立場に追い込まれていないだろうか。(実際、マイノリティに属する市民、例えば、女性、少数民族、同性愛者、障害者、少数派の宗教を信仰する人たちのアイデンティティやニーズは、周辺

化されて、軽視されてきた。個人々人の個性・歴史性を無視した考え方は、ある人が自分の潜在能力を十全に発揮して生きるために要する個別のニーズに配慮されない。

16 近代科学が自然環境にもたらす問題と、これらの従来の原子論的な個人概念から生じる政治的・社会的問題とは同型であり、並行していることを確認してほしい。

17 自然の話に戻れば、分解して個性をなくして利用するという近代科学の方式によって破壊されるのは、生態系であることは見やすい話である。自然を分解不可能な粒子と自然法則の観点のみで捉えるならば、自然は利用可能なエネルギー以上のものではないことになる。そうであれば、自然を破壊することなど原理的にありえないことになってしまおうはずだ。

18 そのようにして分解的に捉えられた自然は、生物の住める自然ではない。自然を原子のような部分に還元しようとする思考法は、さまざまな生物が住んでおり、生物の存在が欠かせない自然の一部ともなっている生態系を無視してきた。

19 生態系は、そうした自然観によって捉えられない全体論的存在である。生態系の内部の無機・有機の構成体は、循環的に相互作用しながら、長い時間をかけて個性ある生態系を形成する。(エコロジーは博物学を前身としているが、博物学とはまさしく「自然史(ナチュラール・ヒストリー)」である。ひとつの生態系は独特の時間性と個性を形成する。そして、そこに棲息する動植物はそれぞれの仕方で適応し、まわりの環境を改造しながら、個性的な生態を営んでいる。自然に対してつねに分解的・分析的な態度をとれば、生態系の個性・歴史性、場所性が見逃されてしまっただろう。これが、環境問題の根底にある近代の二元論的自然観(二元論的人間観・社会観)の弊害なのである。自然破壊によって人間も動物も住めなくなった場所は、そのような考え方がもたらした悲劇的帰結である。

ex4 =

(河野哲也『意識は実在しない』)

Now

Now

今回のポイント…骨子を透視しつつ、論拠の同定・集約とする”
 ①に対する②③段落の補足と、
 ④に対する⑤～⑧段落の補足が同内容。
 EX1がEX8の研究対象という2はがりに気付ければ、
 全ての問いが同根柢の分かる。レトリック
 妙な言い回しはたいてい伏線

設問

- (一) 物心二元論(傍線部ア)とあるのはどういうことか、本文の趣旨に従って説明せよ。
 内容説明、語の定義。
 (四)の内容とかがぶるが、まず「二元性の定義」を考え方を説明。
- (二) 自然賛美の抒情詩を作る詩人は、(傍線部イ)とあるが、なぜそのような事態になるといえるのか、説明せよ。
 Now ↓筆者や読者の直面するどの問題とつながるか考慮する。
 (いまや人間の精神の素晴らしさを讃える自己賛美を口にしなければならなくなった)
- (三) 自然をかみ砕いて栄養として摂取することと比較できる(傍線部ウ)とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。
 論拠説明
- (四) 従来の原子論的な個人概念から生じる政治的・社会的問題(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。
 包E含 → 内容説明
- (五) 自然破壊によって人間も動物も住めなくなった場所(傍線部オ)とはどういうことか、説明せよ。
 自然の中の生物の問題も含む → 内容説明
 自然の崩壊を念ひ、そのような考え方がもたらした悲劇的帰結である(傍線部オ)とはどういうことか、本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。(句読点も一字として数える。)

(六) 傍線部 a、b、c、d、e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

- a コカツ
- b コウリツ
- c チツジョ
- d シントウ
- e コウカン

問1

「本文趣旨」と聞いたときに、傍線部が本文で「関連する範囲」を参照できたかどうか勝負。
本文を「自分の頭で理解できたかどうか」が重要ではなく、この一手によって、必要な「伝わる言葉」が“求まる”。

- c 〈本文の趣旨〉…物心二元論は、近代科学の自然観（4～10段落で詳述）の一部として、それが生態系の維持や保護に相反する発想を含んでいる（3段落）
場所の特殊性や個性を失わせてきた（10段落）こうした積み重ねが現在の環境問題を生んだ（12段落）

〈傍線部文脈の解説〉「ここから、物・心二元論が生じてくる」

- a 近代科学が行き着いた自然観の最終形（機械論→原子論的還元主義→物心二元論）
b 物心二元論に直接言及する8・9段落の対比のまとめ（没価値の存在・非存在の価値＝主観的な意味付け以外の価値を物理学的世界に認めない）

※言及範囲を参照する「視野の広さ」ごとに点差を付けながら、受験生の事務処理能力に一定の得点を与える設問。

問2

〈物心二元論が、「いまや」どのように状況を変えてしまったのか、そしてそれはなぜか〉

- a 物心二元論のせいで、状況が変わったから。
b 自然が（環境が・生態系が）特定の場所や物としてもっていたはずの個性が、賛美・評価の対象から外れて、
c 自然の賛美される意味や価値が、主体となる人間存在が心や脳の中で知覚したものと定義されるようになったから。

※「自然の美点」を、b要素の説明まで昇華できるかが主眼となる設問。

問3

※抽象的・文学的な表現描写を、文中でより有効な言及内容に置き換えさせる問題（文系第4問で頻出する問題）。

〈ex5, R1前後の内容＝11・12段落のまとめ〉

近代科学の自然への態度が「“かみ砕く” 栄養扱い」と言えるのは、

- a（第一の特徴）法則が、自然を改変・操作する技術・手段となる
b（第二・第三の特徴）人間の主観だけが自然（物的世界）に価値を与える
（a bともに12段落の内容）
c（+R2・ex5の前後）自然の徹底的な利用すなわち「材料として他の場所で・別の用途として利用される」

問4

※コ系の指示語がもたらす「前文脈の継承」と「次文脈・新展開の導入」を全体的・網羅的に見ているかを問う問題。

- a（12・13段落）現在の環境問題を生んだ自然に対するとらえ方（近代科学の二元論的自然観）が、
b（★18・19段落）内部の様々な構成体・生物の存在が一部となっている生態系であるはずの、
c（ex6,7）人間の特殊な文化的背景や歴史性（個性）をその前提として排除してしまうという問題。

問5

※「人間・動物＝生態系内部の構成体」という文章後半の端的な主張を、冒頭の問題提起と関連付けさせる問題。

- ☆a 近代社会に浸透した自然に対して分解的・分析的な態度＝近代科学の二元論的自然観（というような考え方）は、
☆b 世界・自然を物的世界として分解し、資源・エネルギーとして主体的・利己的に利用した、
☆c のと同時に、「生態系」内部の構成体にも同じ〈↑〉弊害を与えた。
☆d 内部で暮らす動物や人間を法に従順な存在としてとらえ、特殊性（文化的背景や歴史性）を排除した。
☆e 本文の主旨である「環境問題」の荒廃は、このように説明できる。

各要素3点、15点採点